



第1回 【問題解決力】生活科 全校授業研究会(8月25日)

照り付ける日差しの中、光沢のある大豆の葉が映える畑を会場に2年生活科の授業で研究会を実施しました。今年度から共同研究の取組として位置付けた“チーム研究”による提案の第1回となります。研究部との協議を経て、授業者の遠藤先生や【問題解決力】チームは検討に検討を重ねてきました。

今年度から取り入れているグループ討議を経て進めた全体討議の内容をまとめると、以下の通りです。

子供が大豆との関わりを“自分事”にするために、授業者にできることを広い視野で考える

発達段階に合わせた見通しのもたせ方があるはず 子供の切実感を引き出すための場の設定(一人1株など)
生産者の存在を教えることもいとわない(パパや先生も生産者に近い存在)

子供の問題意識と授業者(大人)の問題意識の乖離をなくす

「土がかたい!」と連呼した子供たちがのめり込んで活動に取り組んだ その子供たちの問題とは何だったのか
「水は上からかける?下からかける?」と問い掛けた授業者 そして のめり込む子供の姿が減ってしまった

生活科の「本質に迫る授業」の中で問題解決力を育てることを忘れない

土はどれだけかたいのか、水のかけ方の違いで枝葉の様子は変わるのか 五感を使った気づきを促す

また、吉村敏之先生、齊藤千映美先生、本田伊克先生の3名の研究協力者の先生方からは、主に次のような指導・助言をいただきました。

- 問題発見の力や“問題を作る”ことを鍛えることも大切
- 動植物の育て方には正解(理)があり、取り返しがつかない
∴ 正解(理)の中で試行錯誤させる 専門家に早く来てもらうべきである
- 一つの授業の事実在即して深い議論ができていた チームの垣根を越えて「全校」のものへ

社会科の研究の概要でも触れていますし、全体討議で拓郎先生も同様のことを話していましたが、問題解決力を育てる上で「教師の導きをいかに減らすか」という視点も欠かせないと考えます。日頃の授業から問題解決に向かう場面を十分に保障し、事象が近いかどうかに関係なく問題解決の主体者となって学習に取り組む姿を目指しましょう。

今回の研究会では、授業観察を通して捉えた子供の姿を基に具体的な討議を進めることができたと思います。次回も、司会を務める先生のコーディネートに沿って一人一人が主体的に意見をもって議論を深めましょう。

授業者の遠藤先生、【問題解決力】チームの先生方、本当にお疲れさまでした。

担当：研究部(牧野・早坂) 文責：研究主任(三浦)